

岐阜・愛知の若年層アクセントの実態

A research on the accents realized by the students of Gifu University

山田 敏弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

岐阜県は、すでに多くの研究が示すように、東海地方における東京式アクセントと京阪式アクセントの接点として特徴付けられる。しかし、老年層においても一生をその地で過ごすことが少なくなってきた現代において、伝統的なアクセントの記述は必ずしも現状に合っていないとの印象も強く受ける。たとえば、岐阜大学に着任した10年前であれば、「靴」や「服」は、岐阜県出身の学生であればたいてい「クツ」や「フク」と頭高に発音し、反面、「県庁」などは、平板型で発音していて、授業でも特に異論が聞かれることはなかったが、現在では怪訝な顔をする学生もいる。方言アクセントも変容する。きちんと現状を描く必要もある。

もちろん地域差も考慮に入れる必要がある。怪訝な顔をする学生が、東濃や愛知県三河地方の出身であれば、アクセントが違う場合もある。しかし、広範囲に往来する若年層については、必ずしもこの地域であればこのアクセントで発音すると言えないこともある。まず、岐阜大学へ通う多くの学生の出身地である岐阜県と愛知県で用いられているアクセントの現状をよく見ておく必要がある。

そこで、2011年度全学共通教育言語学Ⅰの受講生に対し何度かアクセントの調査をおこない、それを出身小学校ごとにプロットし作成してきた地図をもとに考察を加えて報告する。当該授業の受講生は、岐阜県と愛知県の出身者を中心に80名（留学生を除く）である。このうち、9名は岐阜県と愛知県以外の出身者であり、これらのデータも今回は参照までに合わせて示す。一方、両県についても、特に飛騨地方や三河地方は、出身学生が少ないこともあり、データが疎である。とはいえ、すべての市町村についてインフォーマントを確保することも現実的には不可能であり、今回報告するおよそ70地点余のデータであっても有効な考察は可能であると判断し、今回考察に至った。

なお、アクセントは、下がり核のみを「▽」で示し、記述の必要性がある場合には高い音節を「●」で低い音節を「○」で示すことにする。地図については、いわゆる平成の大合併以前の行政区画によって示し（岐阜市については校区ごとの補助線を、名古屋市については区ごとの補助線を加筆してある）、受講学生の卒業当時の小学校の位置にデータをプロットする。記述においては、現在の行政上の呼称によって示すこととする。

2. 岐阜・愛知のアクセント概説ならびに調査方法

岐阜県のおよそ半および愛知県は、いわゆる垂井式アクセントと呼ばれる岐阜県西部を除き、基本的に東京式アクセントの地域と考えられている。これは、山田(2011)に示したように、2拍名詞アクセントでも同じで、すべての類で基本的に東京式アクセントを取る。

なお、○△は低い拍、●▲は高い拍を示す。また、○●は名詞部分を、△▲は助詞部分を示す。関西方言に関しては、音節内で降下するアクセントがあるが、これは、●で表す。

類—末尾母音	語 例	京都	富山	垂井	岐阜	東京
I	庭, 鳥, 鮎, 鼻…	●●▲	○●▲	●●▲	○●▲	○●▲
II-i・u	石, 紙, 橋, 雪…	●○△	●○△	●○△	○●△	○●△
II-a・e・o	歌, 音, 旗, 胸…		○●△			
III-i・u	足, 犬, 月, 鬼…		●○△			
III-a・e・o	山, 腕・草・花…		○●△			
IV	笠, 糸, 海, 空…	○● ○●▲	○●▲	●●▲~ ○●▲	●○△	●○△
V-i・u	秋, 春, 鯉, 猿…	○● ○●▲	●○△	●○△		
V-a・e・o	雨, 窓, 蔭, 汗…	○●▲	○●▲			

表1 中部方言の2拍名詞アクセント

しかしながら、すでに述べたように、岐阜県や愛知県のアクセントは東京アクセントとまったく同じというわけではなく、語によって、また地域によってアクセントが東京のものとは異なることがたびたび指摘されてきた（梅沢1952, 奥村編1976, 山田2004など）。

また、はじめにも書いたとおり、岐阜の伝統的なアクセントも時代とともに変化してきていることに加え、それは必ずしも地域が一様になるのではなく、特に大学生のような若い世代ではさまざまな変化を呈するようになってきている。さらに、個人差も見られ、また、個人の中でのゆれもある。

本考察では、このような若年層アクセント調査の困難な点は十分に認識しつつも、まずは岐阜大学に通う岐阜・愛知出身者のアクセントのおおざっぱな分布を掴むべくおこなった調査の報告をおこなう。調査は、授業中にアンケート用紙を配布し、調査しようとしている語、あるいは活用形のアクセントを、紙面上で示し同時に音声的に聞かせて、地元でくつろいだ雰囲気話しているときに「もっともしっかりくる」アクセントを選択して回答してもらうという方法で採取した。

3. 代表的な名詞のアクセント

先に示したとおり、岐阜県および愛知県は、基本的に東京式アクセントである。しかしながら、「靴」「服」「坂」など第Ⅲ類の二音節名詞は、東京式の尾高型ではなく、岐阜では頭高の京阪式となるなど、一部に東京式でないアクセントが見られる。また四音節の「県庁」「身長」なども頭高型の東京アクセントとは異なり、平板式となることが一般的である。

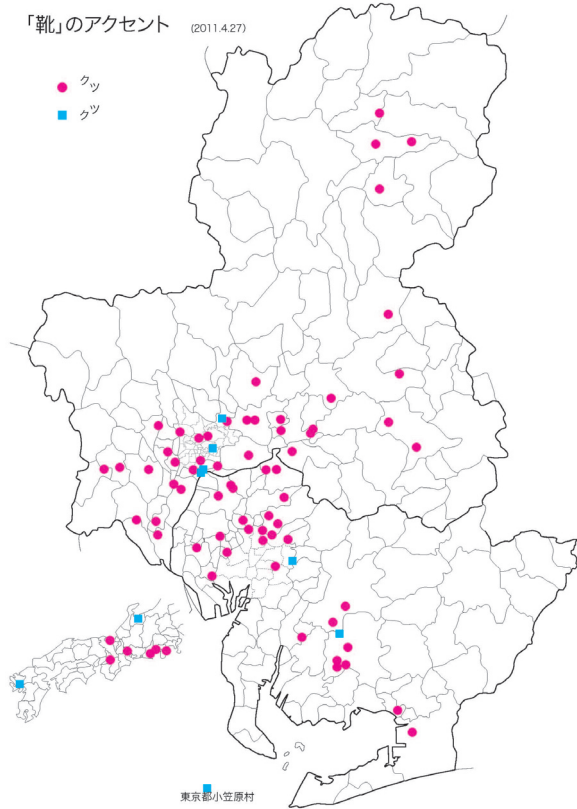
これらのアクセントについて調査をおこなった結果を、次ページの地図1, 地図2に示す。

まず、地図1に示した「靴」であるが、一部に尾高型の「クツㄗ(ガ)」■と共通語と同じ型も見られるが、今回調査した範囲では広く「クㄗツ(ガ)」●と頭高型で発音するのが一般的である。

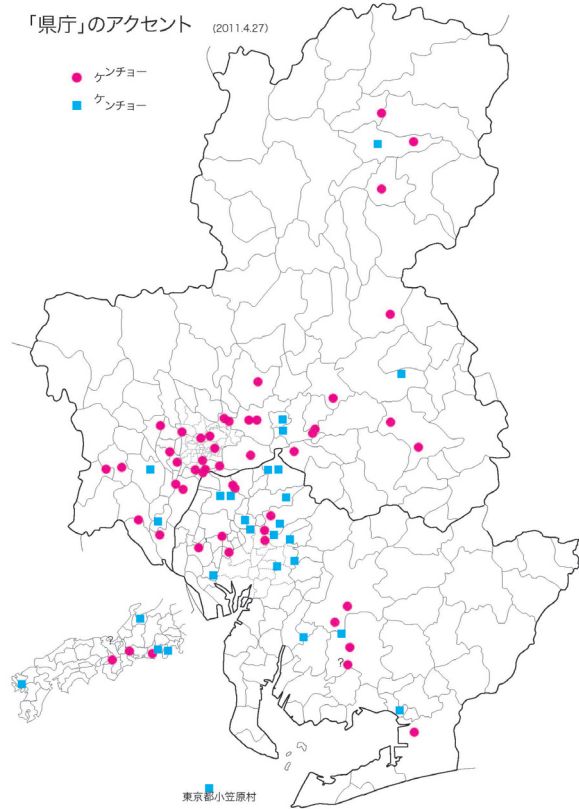
この「靴」のアクセントは、隣接する三重県四日市市および静岡県内3地点でも同じように、頭高型アクセントであった。今回、地図は描けなかったが、「服」についても授業内の調査で同様に頭高型が一般的であった。これらのアクセントは、従来型と変化していない。

一方、四音節の「県庁」は、「ケンチョー」と平板型の●が、岐阜県内で圧倒的であるが、愛知県では必ずしも一般的ではない。およそ半々で頭高型■が見られる。

なお、「岐阜県庁」も「愛知県庁」も、複合語であれば地名のあとは「～ケンチョー」と「ケ」で下がるが、このような複合語のアクセントではないことを明示して調査をおこなった。



地図1 「靴」



地図2 「県庁」

愛知県の伝統的なアクセントがいずれであるか確定した資料はないが、愛知県出身の30代・40代数名からは平板型アクセントが得られている。今回得られた資料からも、愛知県三河地方などに平板型も多く見られるが、反面、共通語と同じ頭高型も多く、愛知県で「県庁」のアクセントが非常に揺れているとわかる。この頭高型■が共通語化の結果得られたものだとすれば、愛知県は、共通語への全面移行直前の状態を示している状態と言えるのかもしれない。

一般に、東京式と京阪式の間際のアクセントとして垂井式が存在が知られているが、これら2図からは、語によってもっとゆるやかに、岐阜県と愛知県の境、あるいは、さらに東まで京阪式と同じアクセントが見られることがわかる。もちろん、類としてその地域でまとまった特徴を示すことが、亜流であれひとつのアクセント式を認定するのに必要であることは認めるが、奥村編 (1976:249-252 など) に一音節名詞第Ⅱ類が、東濃地方で漸次的に東京式から京阪式 (ただし長音化は除く) に移っていると指摘されているように、岐阜県から愛知県にかけては、さながらアクセントの段々畑であり、東京式から京阪式への漸次的移行地帯と特徴付けられるほうが適切である。

伝統的なアクセントの、これだけの地点での調査は、管見の限り見当たらないが、この地域が特に、ややまだら模様の分布を呈するというのも、このような漸次的変化地帯だからこそと考えられるであろう。

4. 数詞と組み合わせられた名詞のアクセント

岐阜県の方では、いくつかの「月」の名前が、共通語のアクセントと異なる。

	イチガツ-ガ	ニガツ-ガ	サンガツ-ガ	シガツ-ガ	ゴガツ-ガ	ロクガツ-ガ
共通語*	○●●●△	○●●△	●○○○△	○●●△	●○○△	○●●●△
岐阜	○●○○△	●○○△	●○○○△	●○○△	●○○△	○●●●△

シチガツ-ガ**	ハチガツ-ガ	クガツ-ガ	ジュ-ガツ-ガ	ジュ-イチガツ-ガ	ジュ-ニガツ-ガ
○●●●△	○●●●△	●○○△	○●●●△	○●●●●●△	○●●●●△
○●●●△	○●●●△	●○○△	○●●●△	○●●●○○△	○●●○○△

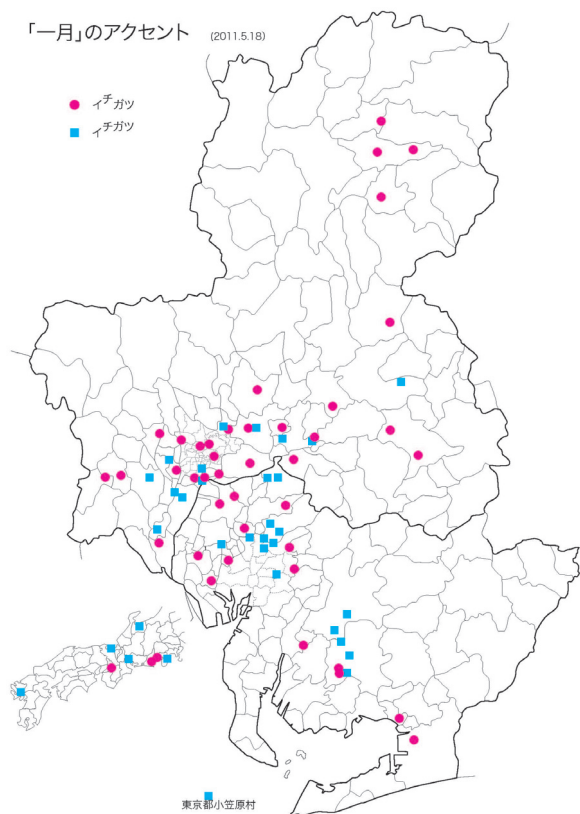
* 「共通語」としたものは、『NHK日本語発音アクセント辞典』による。

** 岐阜では「ヒチガツ-ガ」が一般的。

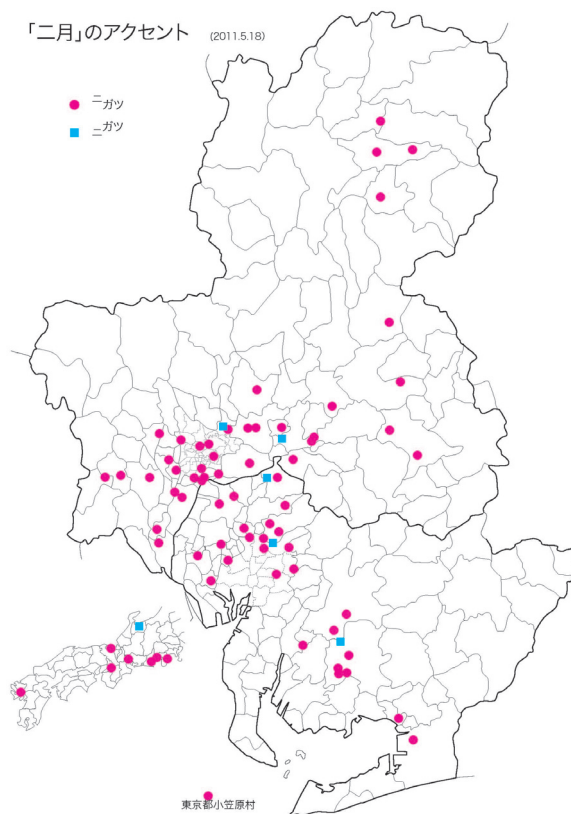
表2 共通語と岐阜方言の月の呼び名アクセント対照表

岐阜のアクセントでは、「一月」「二月」「四月」の下がり核が、共通語よりも前倒しされ、「ガツ」の直前で下がるというように統一されている。「一月」は、梅沢 (1952:3) でも岐阜方言で「イチㄱガツ」となっている。また、「十一月」「十二月」も岐阜方言では「一月」「二月」のアクセントを踏襲し「ガツ」の直前にアクセント核がある。結果、12ヶ月中5月で、共通語と異なるアクセントが実現されている。

しかし、あくまでこれは、筆者が伝統的な岐阜方言として内省したものであり、若年層では、次のようにややばらける結果となった。



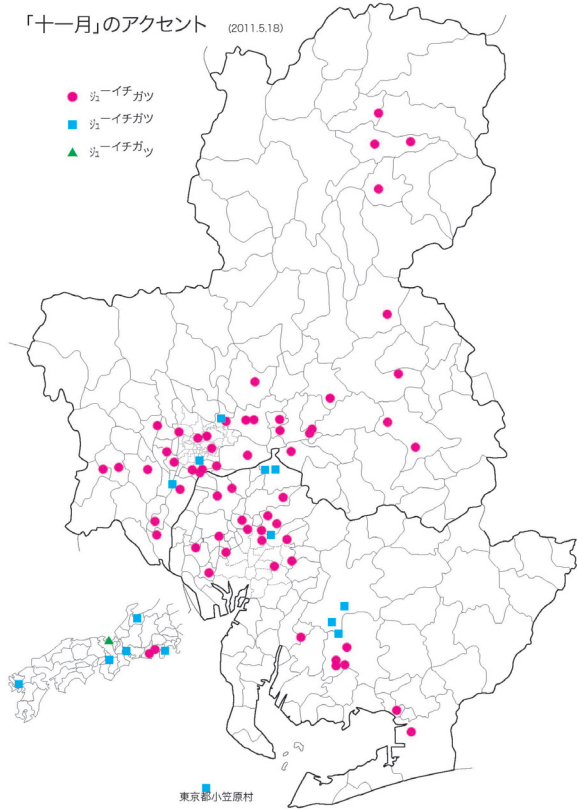
地図3 「一月」



地図4 「二月」

「二月」は、広い範囲で、非共通語形式である頭高型が観察されたが、「一月」は、かなり統一感のない様子を呈している。特に、「一月」については、名古屋市近辺で共通語と同じ尾高型が目立つ。

では、「一月」と「十一月」を比べてみるとどうだろうか。地図3と地図5を比べてみると、「十一月」で中高型が増えていることがわかる。つまり、「一月」については、共通語の尾高型をよく耳にして取り入れているが、より複雑な「十一月」ではこの地域に伝統的な形式が回答されているということである。



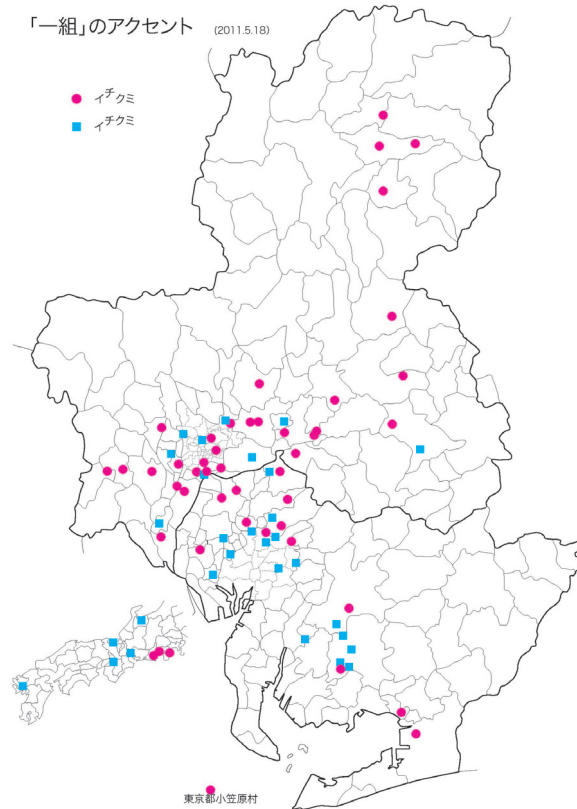
地図5 「十一月」

このことから、若い世代では、一律に共通語化しているのではなく、伝統的な方言アクセントを一部にひきつぎながら、より頻繁に耳にする語形について共通語化させていると考えられる。ただし、平成23年8月6日の広島原爆死没者慰霊式で菅直人首相（東京都18区選出）も「ジュイチ⁷ガツ」と発音し、この中高型は、他のニュースなどでもよく耳にする。すでに、東京でも、同様の変化が進んでいることは20年ほど前から知られており（国立国語研究所 三井はるみp.c.）、現在の共通語の変化と照らし合わせながら今後考察する必要がある。今後の課題としたい。

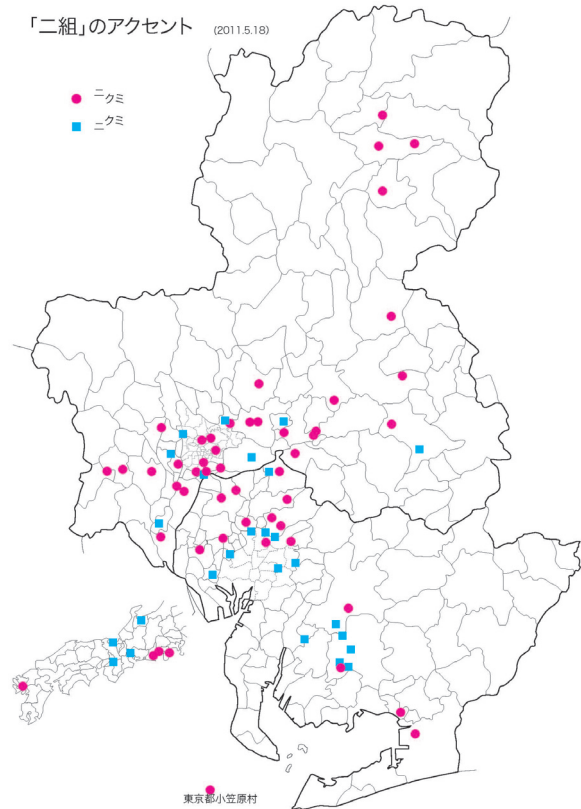
さらに今回、「～組」が付いたアクセントを尋ねた。

筆者の内省で「イチクミ」「ニクミ」「サンクミ」は、「○●○○」「●○○」「●○○○」と、共通語と同じであるが、調査結果からは、月の名前以上にまだら模様となった分布が描かれた。

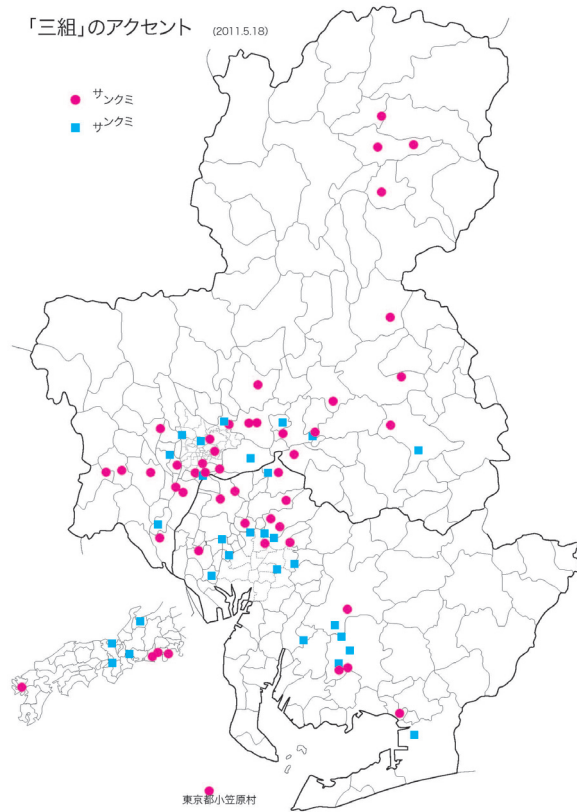
概して、愛知県で平板型の■が多く見られる。



地図6 「一組」



地図7 「二組」



地図8 「三組」

このような、共通語とも異なる平板式（いずれも■で示してある）は、京阪地方で今回得られた結果と照らし合わせるとたしかに連続性をもつ。しかし、岐阜県内の分布は、必ずしも多くなく、かえって名古屋周辺に多いのはやや奇異である。

いわゆる、若者アクセントとしての平板式であるのか、あるいは、地域的な変種であるのかについては、これらの語が、おもに学校という限られた地域で用いられることから、前者の可能性がやや高いものと推察される。

少ない資料から拙速に判じるのは避けなければならないが、おそらく、「～階」や「～カロリー」のような、助数詞自体のアクセントが全体に強く作用し変動しにくいものを除き、当地では、特に愛知県で、（共通語と同じ）平板型への統合という、規則の単純化方向が見られるのではないか。

より、多くの数詞+助数詞のアクセントの経年変化を観察することによって、この地のアクセントの体系的変化を、今後見ていく必要があるだろう。

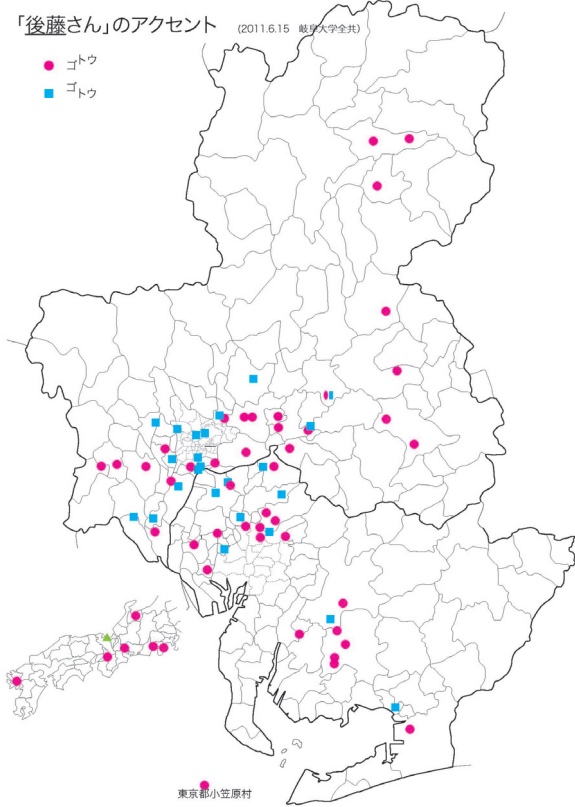
5. 固有名詞のアクセント

固有名詞の中でも、名字は、異なって呼ばれると、特に違和感を持たれる（「山田」は共通語でも当地の方言でも平板型である。ボールドという洗剤のCMで外国人妻の発音として流される「ヤ[↑]マダ」という頭高型アクセントは、奇異に感じさせることで印象づける効果を狙ったものであろう）。当地の名字のアクセントに関する研究には、京阪式の三重県を含む岐阜・愛知との県境域を中心に扱った鏡味明克（2003）などがあるが、今回は岐阜県と愛知県を中心に、より広域に分布を見ていく。また、鏡味（2003）のような、世代間比較ができるデータは得ていない。

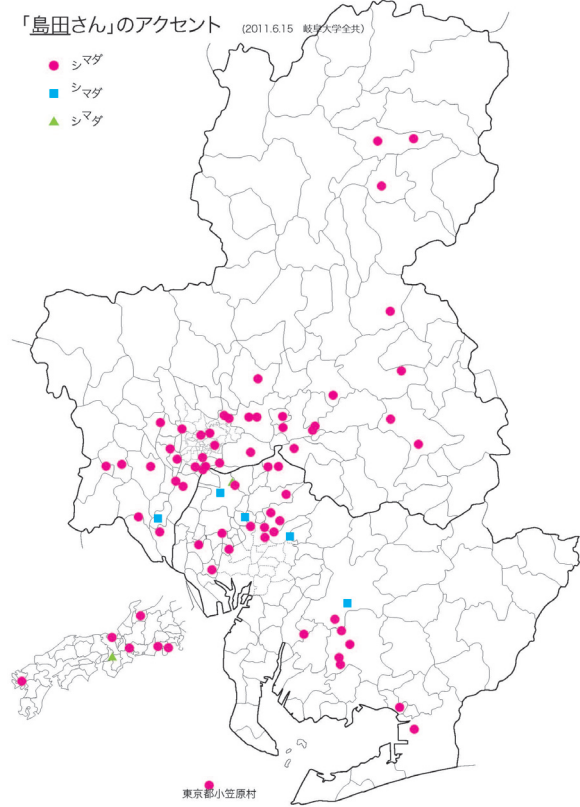
今回は、「後藤」「島田」「松田」「増田」「森」について調べた。まず、「後藤」「島田」「松田」「増田」については、「さん」を付けた形でのアクセントを問うた。結果、「後藤さん」「島田さん」ともに、やや地域差が見られた。

「後藤さん」は、岐阜市でよく頭高型アクセントで発音されるのを耳にするが、今回の若年層に対する調査でも同様の結果が得られた。特に岐阜市近郊に集中して頭高型が見られることには注意したい。

一方、「島田さん」は、逆に岐阜県内ではほとんどが平板型であった。■で示した頭高型アクセントは、尾張地方に3カ所見られる他、隣接する豊田市や岐阜県南部にも見られた。たまに聞く、というレベルなのであろう。

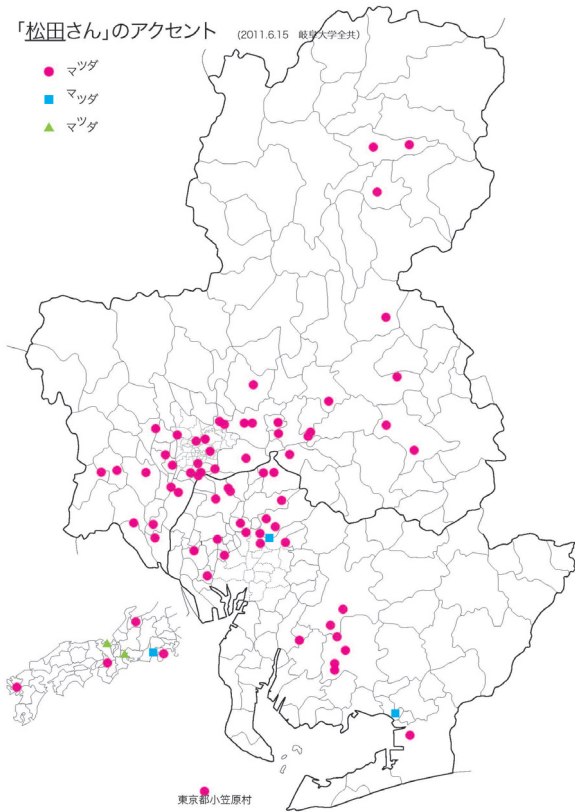


地図9 「後藤さん」

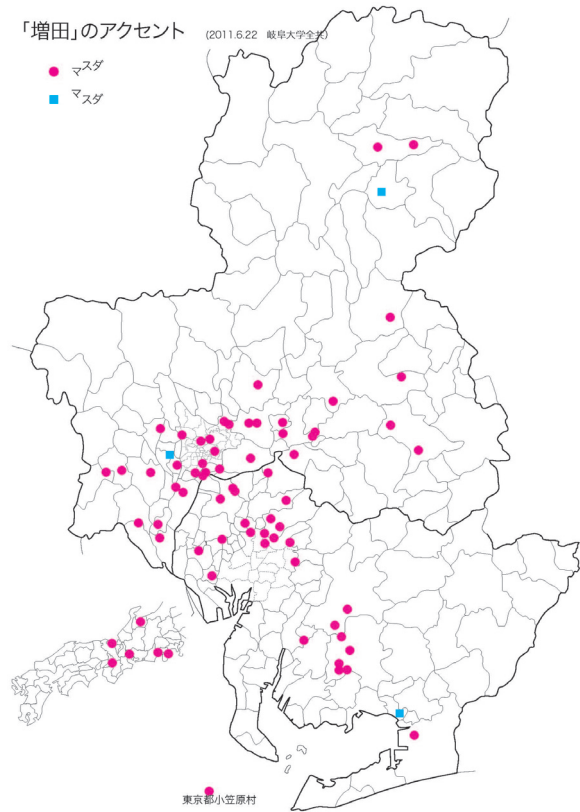


地図10 「島田さん」

一方で、「松田さん」「増田さん」については、ほぼ全域で平板型で現れた。



地図11 「松田さん」

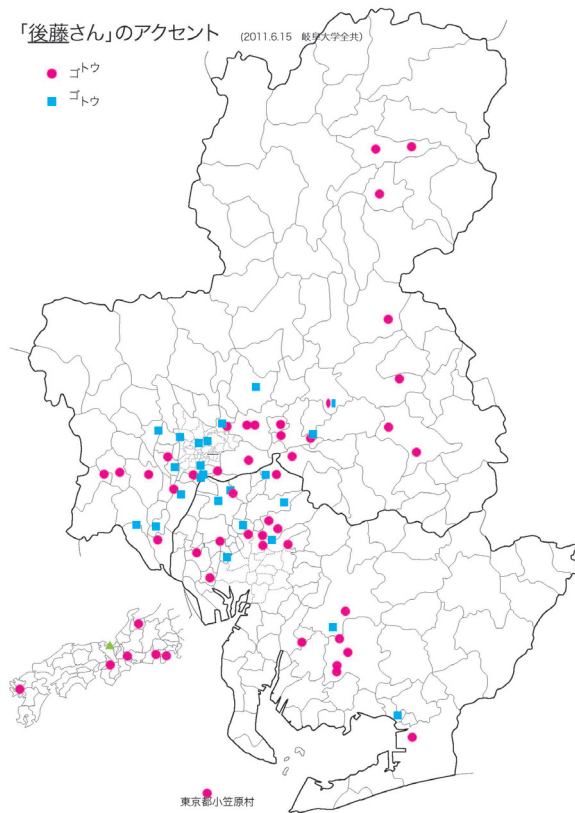


地図12 「増田さん」

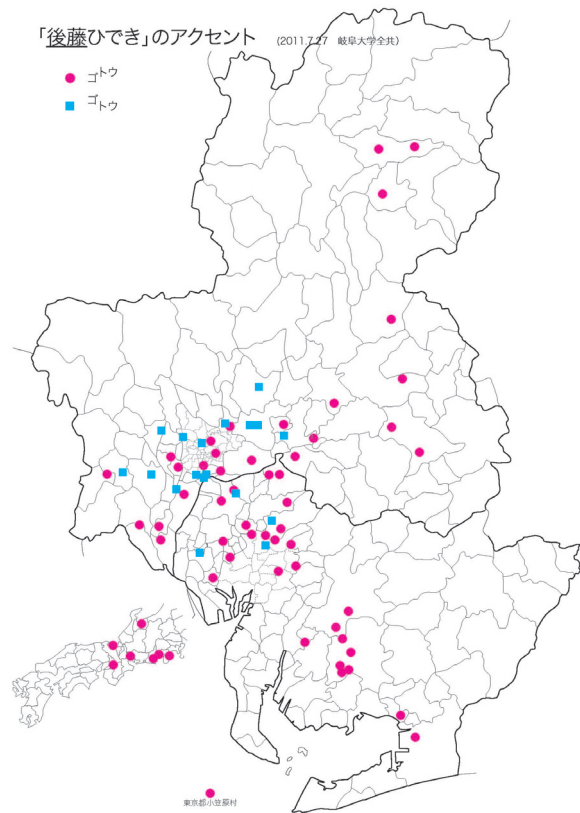
NHK放送文化研究所編 (1998:184-185) は、名字について、「普通名詞の法則に似る。前部・後部とも2拍以下の複合語は、はっきりとした法則が立てにくい」と述べる。上で挙げたような名字はいずれもこれに該当し、法則が立てにくく、また、個別のアクセントも示されていない。一方、秋永編 (2006:(30)-(31)) では、傾向としてはあるが、「田(ダ)」などが後部要素となる場合に「比較的平板型が多い」ことなどを挙げる。ただし、「後藤」など個別の姓については情報が無い、つまり、規則性が十分に得られない。これだけ頻度も高く日常的に用いられている語である。全国的な名字アクセントの詳細な分布が、報告されることが望まれる。

さて、ここで考えなければならないのは、名字がいつも固定されたアクセントを取るかということである。学生の中からは、後に(姓に対する)名前が来る場合で違うのではないかと、また、単独の場合と「さん」が付いた場合では異なるのではないかと、という意見が出た。

まず、姓のみの場合と、姓+名の組み合わせで異なるか否かという点であるが、今回、次のような結果となった。地図9と並べて示す。



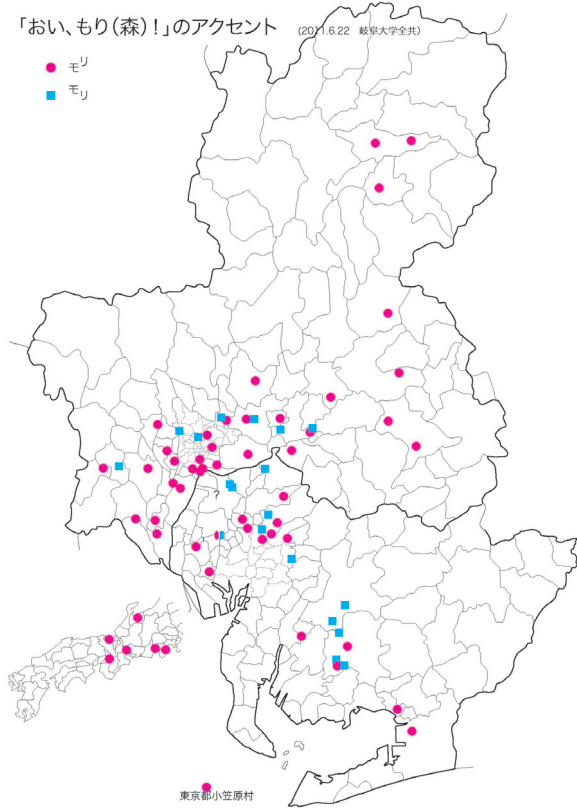
地図13 「後藤さん」=地図9



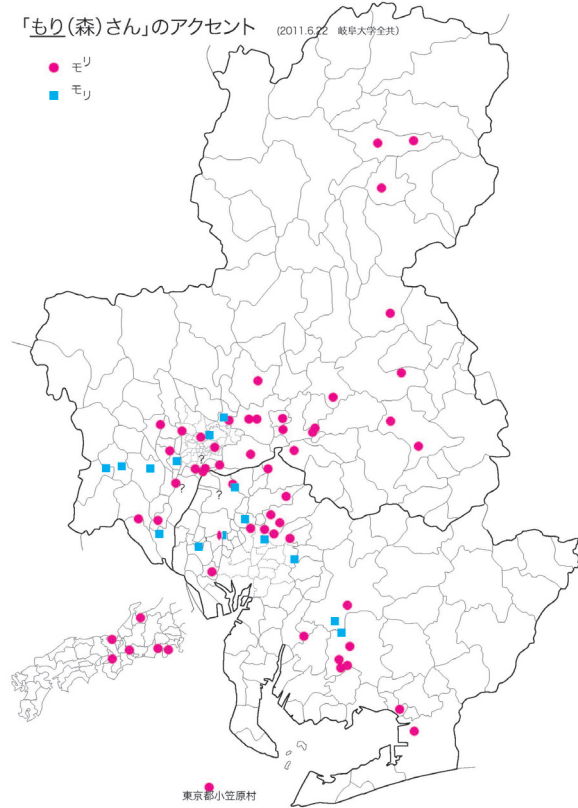
地図14 「後藤ひでき」

秋永編 (2006: (35)-(36)) は、名字が頭高の場合、特に、歴史的な人物・有名人を除けば一語化することは少ないとするが、今回も、入れ替わりはあるが、ほとんど分布に差はなく、一定の傾向も観察されなかった。

また、「さん」が付いた場合にアクセントが変わるかという点であるが、次のような結果が得られた。



地図15 「森！」



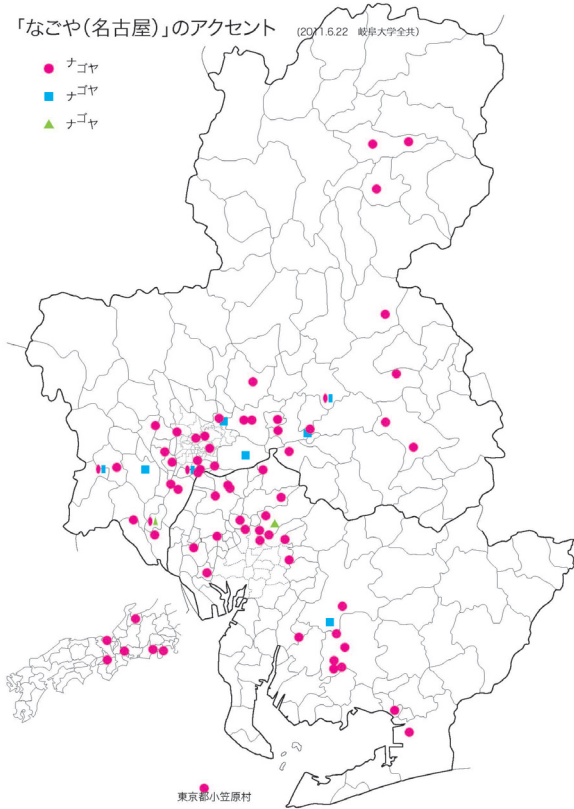
地図16 「森さん」

単独の場合、頭高であるのに対し、「さん」が付いた場合に平板化する例が、特に愛知県では見られる。一方、岐阜県の場合、逆に、単独で平板であるのが「さん」が付くと頭高になるという例が、特に西濃地方に3例見られる。前に挙げた学生の証言を支持するデータとして興味深い。ただし、いずれも地域でまとまった傾向が読み取れるレベルとは言えないであろう。

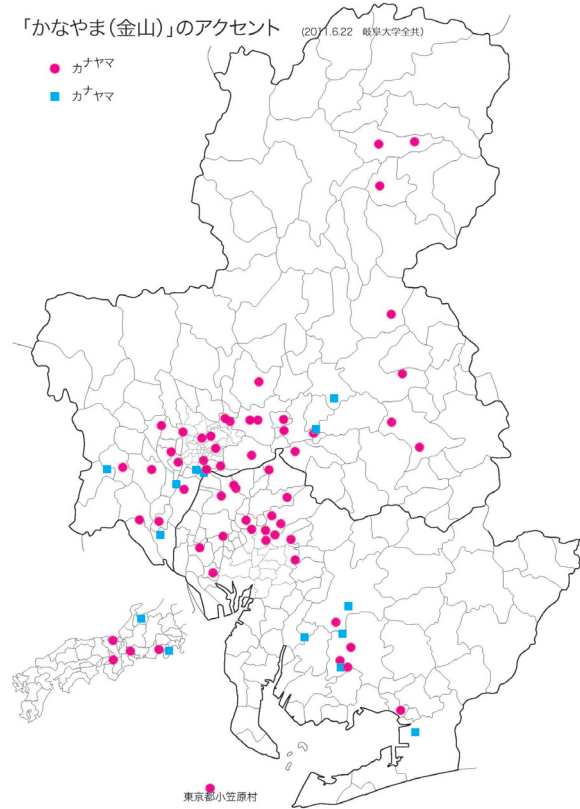
もうひとつ関連して、地名2点に関する調査結果を挙げておく。今回は、「名古屋」と「金山」について調査をおこなった。名古屋市の地名アクセントについては、鏡味・小原(2001)が詳しく、老年層と青年層の比較もあるため、参考にしつつ今回の分布を考えていく。

「名古屋」は、鏡味・小原(2001:12, 15)にもあるとおり、従来、平板型であったが、一方で、中・青年層を中心に頭高型で発音されることが多い。また、名古屋駅の隣の駅である「金山」も、従来は平板型で発音されることが多かったが、中・青年層では「ナ」に下がり核を置く中高型で発音される(鏡味・小原: ibid.)。なお、名鉄電車車内アナウンスなども「ナ」に下がり核がある。

今回、大学生世代に調査したら次のような結果となった。



地図17 「名古屋」



地図18 「金山」

「名古屋」は、広く頭高型●で現れた。これは、鏡味・小原 (2001) で青年層アクセントとされたものである。一方で、平板型■も岐阜県美濃地方や愛知県三河地方にちらほら見られる。旧来のアクセントを受け継いだものと考えてよいとすれば、周圈的に古形が周辺部に残存したことになる。ただ、学生からは、ちょうど、「彼氏」や「クラブ」を平板型で言うと現代的なイメージが表現できるのと同じように、かっこよく言う場合に平板型を使うとの意見も得られている。従来型を引き継いだ平板型と、若者イメージによる平板型がどう拮抗していくのか興味ある点である。

一方の「金山」であるが、今回、鏡味・小原 (2001: 15) とは異なる結果が得られた。名古屋および周辺の尾張地方を含めても、中高型■は見られなかったのである。むしろ、中高型■は、愛知県三河地方や岐阜県西濃地方など一部に固まってみられたが、それでも、この地方では平板型●が主流であった。このような地名に関し考察する場合、その地名に対するなじみ深さという尺度を考察に入れる必要がある。三河地方から岐阜大学に名鉄電車に通っている学生が車内アナウンスから「カナヤマ」というアクセントを学んだ可能性もあるが、今のところ因果関係ははっきりしていない。

6. 動詞活用形のアクセント

共通語では、動詞は、たとえば三音節五段動詞で3つのアクセント式を取る。すべての活用形および接辞との組み合わせを示すことは難しいので、代表的な活用形・接辞付加形を示すと次のようになる。

共通語	否定形	テ形	マス形	終止形	假定形	命令形	意向形
帰る [頭高型]	カエラナイ ○●●○○	カエッテ ●○○○	カエリマス ○●●●○	カエル ●○○	カエレバ ●○○○	カエレ ●○○	カエロー ○●●○

流す [中高型]	ナガサナイ ○●●○○	ナガシテ ○●○○○	ナガシマス ○●●●○	ナガス ○●○	ナガセバ ○●○○○	ナガセ ○●○	ナガソー ○●●○
燃やす [平板式]	モヤサナイ ○●●●●	モヤシテ ○●●●●	モヤシマス ○●●●○	モヤス ○●●	モヤセバ ○●●○	モヤセ ○●●	モヤソー ○●●○

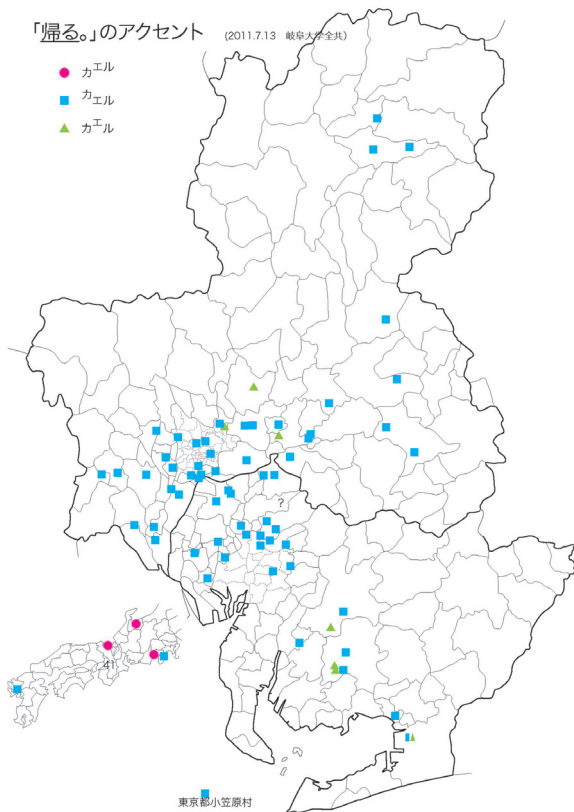
表3 共通語における動詞の活用形アクセント

これが、筆者の内省による岐阜のアクセントでは、アクセント型がすべて中高型に統合され、次のようになる。

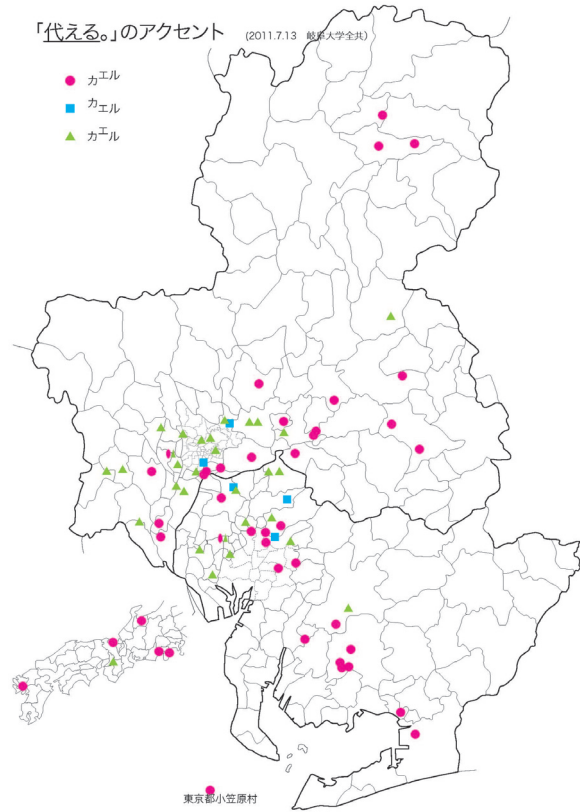
岐阜方言	否定形	テ形	マス形	終止形	仮定形	命令形	意向形
帰る	カエラナイ ○●●●○	カエッテ ○●○○○	カエリマス ○●●●○	カエル ○●○	カエレバ ○●○○○	カエレ ○●○	カエロー ○●●○
流す	ナガサナイ ○●●●○	ナガシテ ○●○○○	ナガシマス ○●●●○	ナガス ○●○	ナガセバ ○●○○○	ナガセ ○●○	ナガソー ○●●○
燃やす	モヤサナイ ○●●●○	モヤシテ ○●○○○	モヤシマス ○●●●○	モヤス ○●○	モヤセバ ○●○○○	モヤセ ○●○	モヤソー ○●●○

表4 岐阜市方言における動詞の活用形アクセント

まず、上にも示した共通語で終止形が頭高型の五段動詞「帰る」と、平板式の一段動詞「代える」を比べてみる。



地図19 「帰る。」



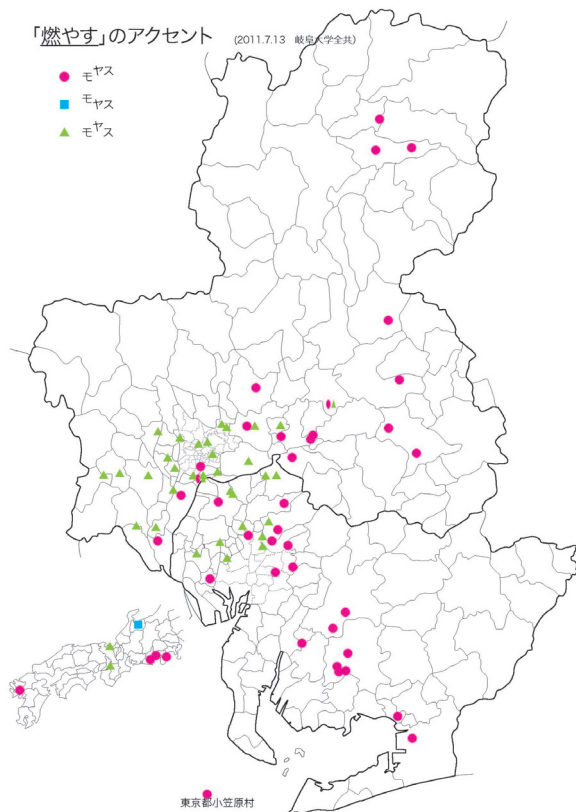
地図20 「代える。」

従来、岐阜では中高型であった「帰る」は、すでに、大半の地域で頭高型■となっており、三河地方と岐阜市周辺に中高型▲が見られるのみとなっている。一方、共通語で平板型●の「代える」は、

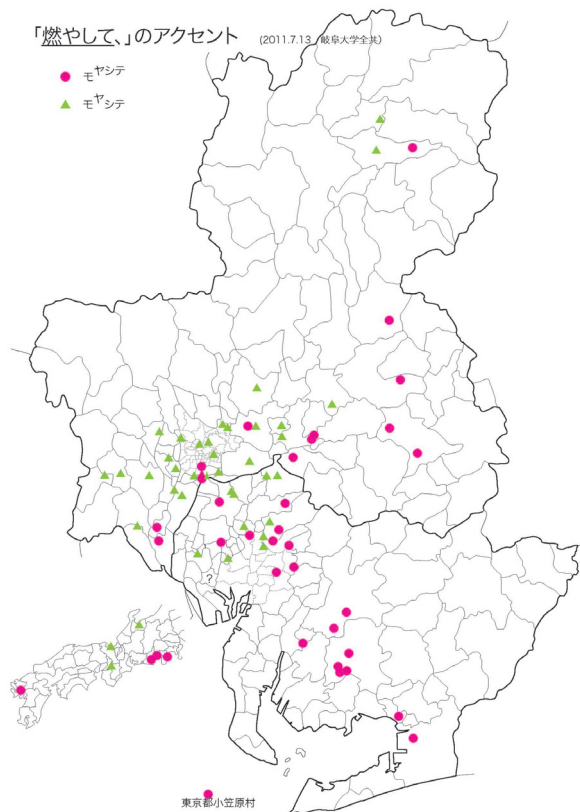
三河地方や東濃、飛騨で、共通語と同じ平板型●が固まって見られるが、尾張地方から岐阜県中濃以西では、中高型▲を多く見付けることができる。五段・一段を問わず、三音節動詞は、終止形が中高型。これが、岐阜方言の基本なのである。

なお、山田 (2002:44) に報告される「名古屋方言」の「変える」(一段動詞) は、平板式アクセントであり、今回の「代える」の結果と符合する。反面、「名古屋方言」のアクセントと岐阜のアクセントがやはり差があることも今回の結果から伺えた。やはり、岐阜と愛知ではアクセントに関し違いがあると考えなければならない。

さて、共通語では平板式となるが、岐阜では中高型となる三音節五段動詞「燃やす」について、その活用形のアクセントを示すと次のようになる。



地図21 「燃やす」



地図22 「燃やして、」

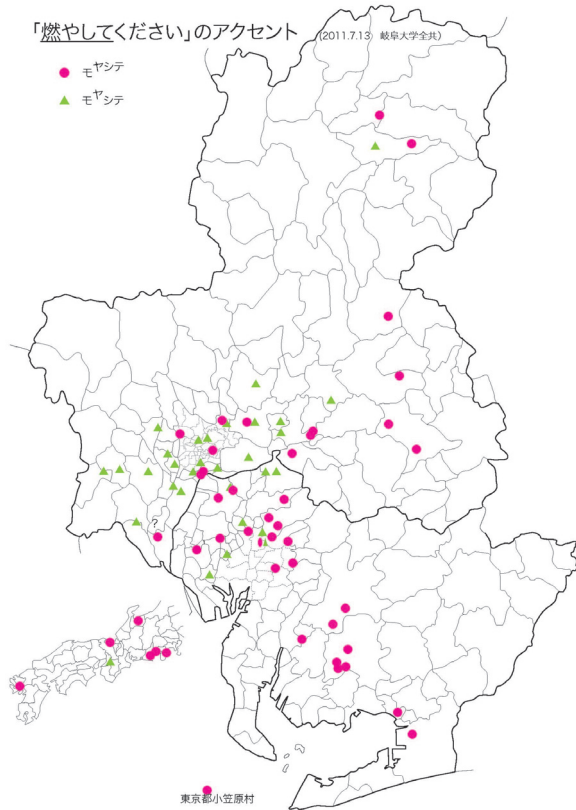
「燃やす」「燃やして」は、おおよそ同じ分布を示している、つまり、「モヤシテ」▲となる地域は、終止形自体も中高型▲である地域の分布とほぼ重なるのである。

しかし、「燃やして、」のように後に続かない場合と、次の地図23に示すように補助動詞が付いた場合では、必ずしも同じアクセントとならない。

地図22と地図23を比較すると、岐阜県内や愛知県尾張地方で中高型であった「モヤシテ、」▲が、「クダサイ」を付加することによって「モヤシテクダサイ」と「モヤシテ」部分が平板化していることがわかる。これは、文法的に言えば、独立した文節として「ください」という補助動詞があるのではなく、「てください」をより独立性の弱い助動詞的として「燃やしてください」で一語と捉えていることの表れと捉えられなくもない。

しかし、このように後部要素があるから平板化したということには疑問がある。美濃地方中西部から尾張地方にかけて、「ヤ」に下がり核のある▲が多く分布し、割合から見れば「燃やして、」が中高

型▲で、「燃やしてください」の「燃やして」が平板型●となっているのは少数だからである。

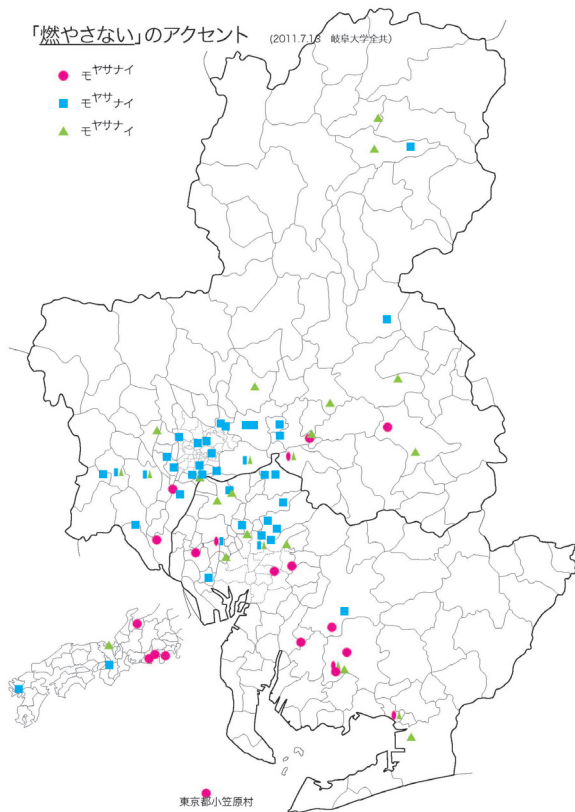


地図23 「燃やしてください」

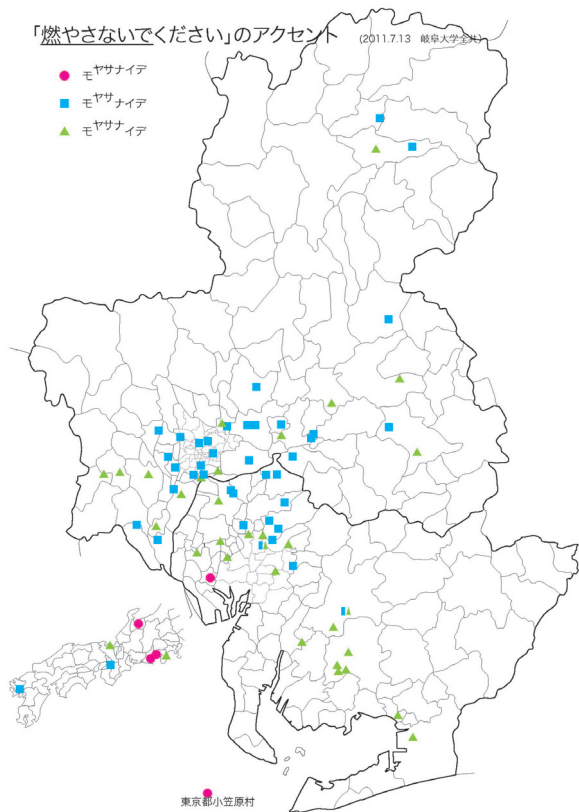
また、「燃やさない」(地図24)と「燃やさないでください」(地図25)を比較しても、後部要素である「ください」がアクセントを決めているとは結論づけられない。

「燃やさない」は、共通語の平板型(●)も東部に散見されるが主流は起伏型である。ただし、岐阜市で従来型と考えられる「ナ」に核のある型(▲)はやや数的に少なく、代わって「サ」で落ちる型(■)が多く見られる。つまり、地図23で「ください」が下がり核を後ろにひっぱることは逆の現象が見られるのである。

このことから、この「サ」に核を持つ型(■)は、一端、中高型に合流した上で、共通語の中高型のアクセント規則によって「ナイ」の前で下がったものと考えなければならない。つまり、やはり、従来、この■も▲と同じ、動詞のアクセントが分化していなかった証拠となるのである。



地図24 「燃やさない」



地図25 「燃やさないでください」

東京では、「燃やさないでください」は、「モヤサナイデクダサ^ㇿイ」となる。しかし、ここまで平らな高い音節を長く保つのは、当地ではやや難しいのではないか。どこかで下がりたいという欲求があり、それが岐阜では「サ」、愛知では「ナ」に前倒しされたものと考えられる。

動詞活用形のアクセントについて、終止形が三音節の五段動詞を「燃やす」を例に示した。もちろん、ここにすべての活用形を示せたわけではないが、後に続く形式によってもっとも差が出やすい否定形およびテ形を中心に見ることで、一定の当地の動詞活用形アクセントの特徴を描けたと考える。

7. 形容詞活用形のアクセント

最後に形容詞のアクセントについて見ていく。

岐阜県では、東濃地方に形容詞のアクセント型別があるが、中濃以西においてはすべての形容詞が、三音節形容詞終止形で中高型（西濃の一部では高起式●●○あるいは頭高型●○○）に統合されるなど、型の区別がない。共通語のアクセントと、岐阜市のアクセントを筆者の内省から示す。

共通語	終止形類			連用形類			条件形
赤い [平板式]	アカイ ○●●	アカイト ○●●●	アカイカ ○●○○	アカク ○●●	アカクナイ ○●●●○	アカカッタ ○●○○○	アカケレバ ○●○○○
青い [中高型]	アオイ ○●○	アオイト ○●○○	アオイカ ○●○○	アオク ●○○	アオクナイ ●○○○○	アオカッタ ●○○○○	アオケレバ ●○○○○

表5 共通語における形容詞の活用形アクセント

岐阜方言	終止形類			連用形類			条件形
赤い [中高型]	アカイ ○●○	アカイト ○●○○	アカイカ ○●○○	アカク ●○○～ ○●○	アカクナイ ●○○○○～ ○●○○○	アカカッタ ○○●○○	アカケレバ ○○●○○

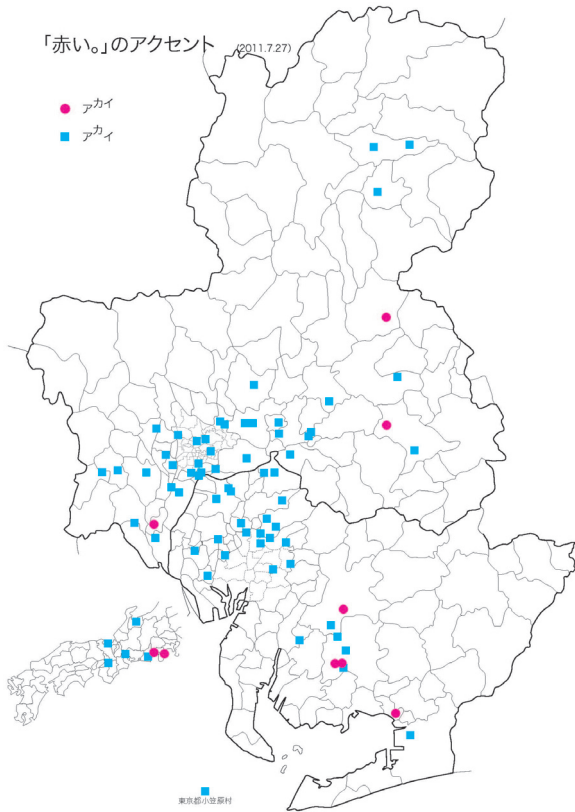
表6 岐阜市方言における形容詞の活用形アクセント

まず、終止形と連体形の区別から見ていこう。

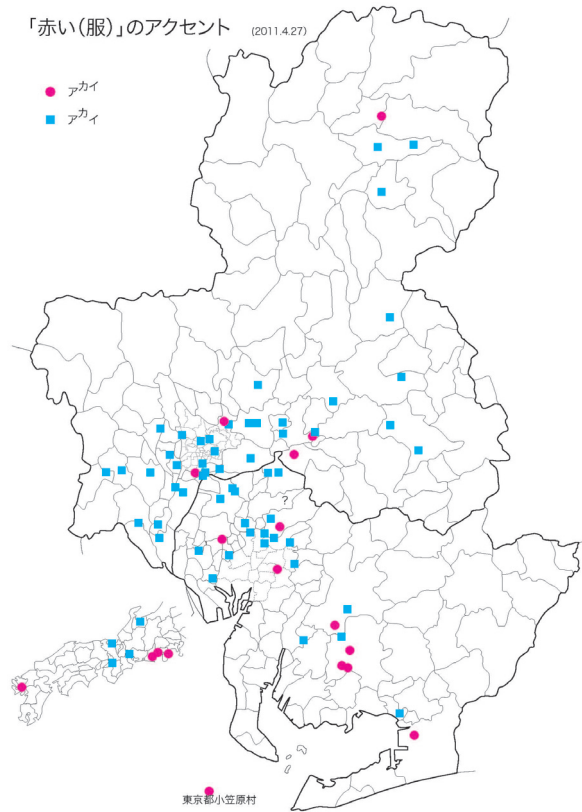
岐阜県東濃地方および愛知県三河地方を除いて、この地域では、一般的に終止形と連体形の区別はなく、いずれも中高型に集約されるとされている。今回の結果からは、地図26・27に示したように概略、そのとおりの結果が得られ、平板型●が多い三河地方を除き、終止形では広く中高型■が見られた（東濃地方でも平板型が多いことが予想されたが、そもそも「東濃」と呼べる地点は、恵那市の2地点しかなく、そのうち1地点が平板型、1地点が中高型となっており、差が見られなかった）。

重要なのは、連体形では平板型だが、終止形で中高型であった地点が複数、観察されたことである。つまり、終止形から予想される「アカ^ㇿイフ^ㇿク」ではなく「アカイフ^ㇿク」となった地点が何地点かあったということである。美濃地方で4地点、尾張地方で3地点、終止形が中高型、連体形が平板型という地点が得られた事実から、連体形で後に名詞が続く場合、「花が（○●△）」が「花の種（○●▲●○）」となるような一語化がおこったとも一見考えられる。

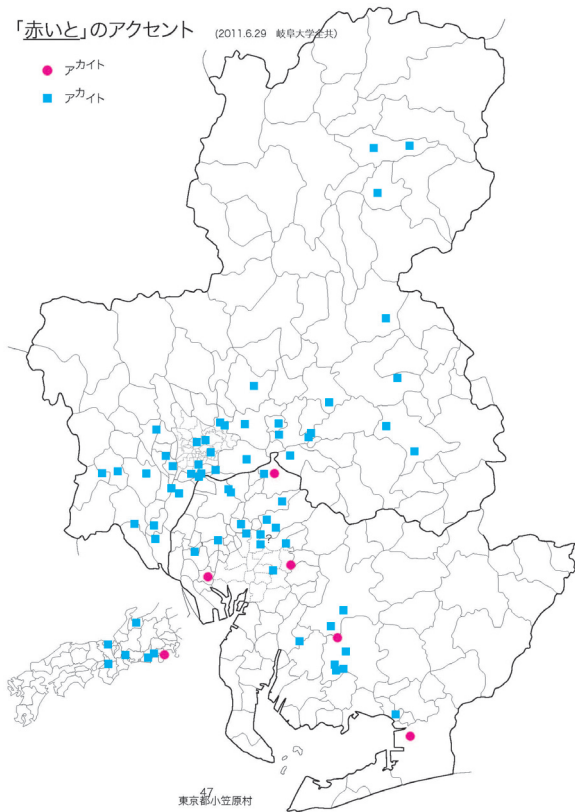
しかしながら、東濃・飛騨南部と三河地方では、逆も見られた。終止形が平板型●で連体形が中高型となったのは、東濃・飛騨南部で2地点、三河地方で3地点（さらに逆も2地点）であった。また、同じように一語化が生じたのであれば、「アオイ」の連体形も平板化することが予想されるが、それはやはり考えにくい。これらのことから、連体形の平板化は共通語化の一現象と考えられる。



地図26 「赤い（終止形）」



地図27 「赤い（連体形）」



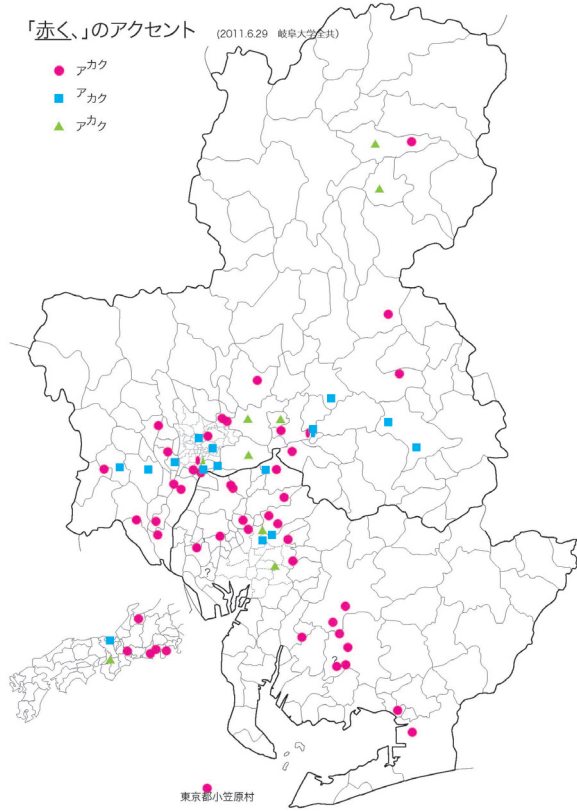
地図28 「赤いと」

さらに、「ト」が付いた形も考えてみる。接続助詞の「と」はいわゆる終止形に接続すると文法的には言われている。いずれにしても共通語では「と」が付加されてもアクセントは変わらず平板型である。

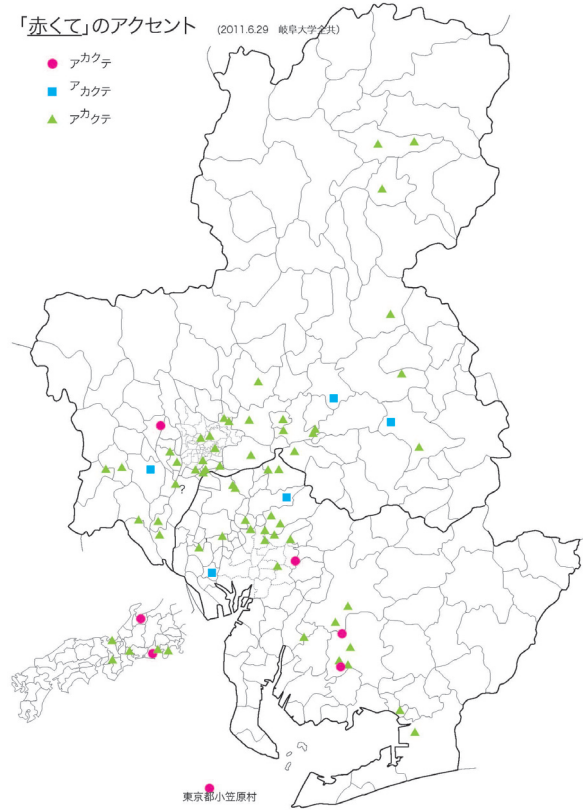
しかし、地図26と比較すると、地図28では、尾張地方で3地点、終止形の中高型■から平板型●へと変化した地点が見られた。これは、連体形と（同じ地点ではないが）類似の方向性である。やはり、共通語のアクセントが現れやすいということであろう。

一方、愛知県三河地方では、単独の「アカイ」は平板型●であるが、「ト」が付くと中高型■へと替わってしまう地点が4地点あった（逆に中高型■→平板型●も2地点）。漠然と、後接要素の存在が、言い切の場合と「違う」アクセントを取っている（あるいは、イントネーションとの混同）というだけなのかもしれない。この点についても、今回明確になった問題点を深める必要がある。

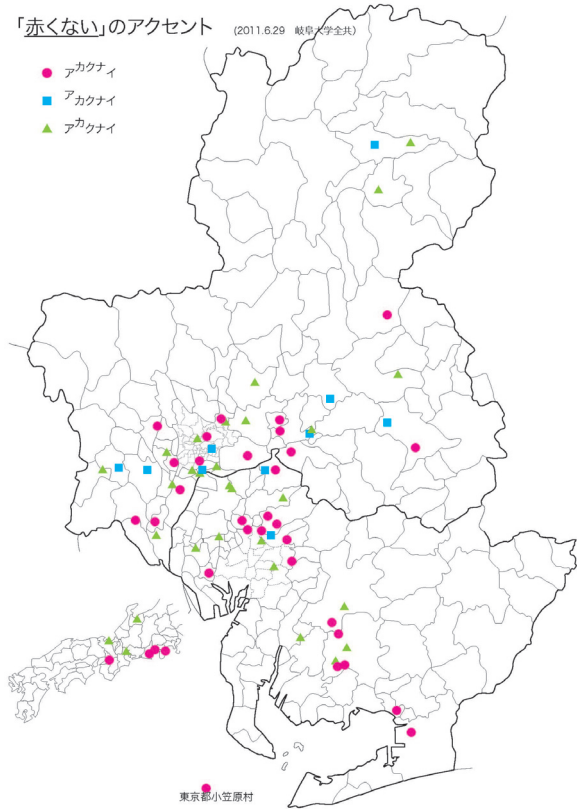
さて、連用形類ではどうであろうか。



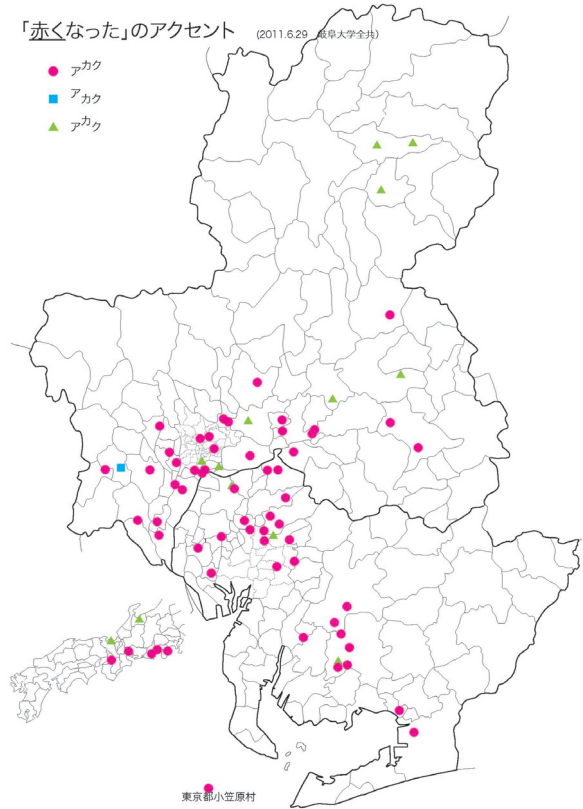
地図29 「赤く、」



地図30 「赤くて」



地図31 「赤くない」



地図32 「赤くなった」

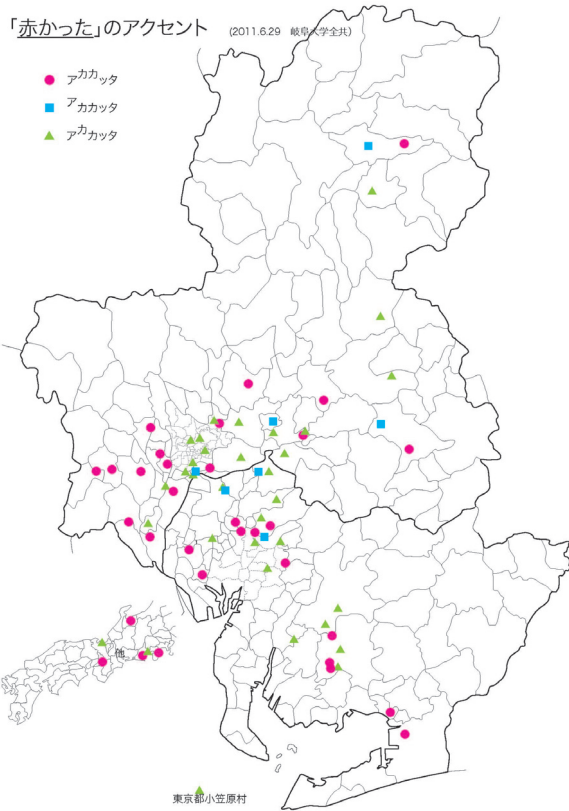
伝統的な語形で調査すれば、たとえばテ形一つ取っても、「アカテ」「アコーテ」「アカーテ」などさまざまな語形で調査をしなければならず、統一した図版にアクセントを描くことはできない。ここでは、まず、伝統的な語形のアクセントではなく、共通語形である「赤くて」等をどのようなアクセントで発音しているかを調査した。

ただ、伝統的語形のもつアクセントと照らし合わせて考えることは重要である。山田(2003)は、名古屋方言の69歳から77歳のインフォーマントに対する調査報告として、「アコ^カーナル」「ア^カカテヨワ^カッタ」「ア^カカナ^カエー」というアクセントを報告している(連用中止形は見当たらない)。梅沢(1952)でも、「赤くて」は報告がないが、同型の「太くて」を「フ^カトクテ」頭高型で報告している。このアクセントが基本的に受け継がれるとすると、名古屋では、本来「ア^カカ^カテ」となることが予想されるが、ここでは、「アカ^カクテ」▲がきわめて優勢となっている。この「カ」に下がり核をもつ「アカ^カクテ」は、実は共通語と同型である。確かに、地図29に示した「赤く、」も共通語と同じ平板型であることから共通語化が進んだとも考えられそうではあるが、終止形や連体形でまだまだ方言アクセント型を多くが保持していることなどから考えれば、共通語化が一気に進んでいるとは考えにくい。

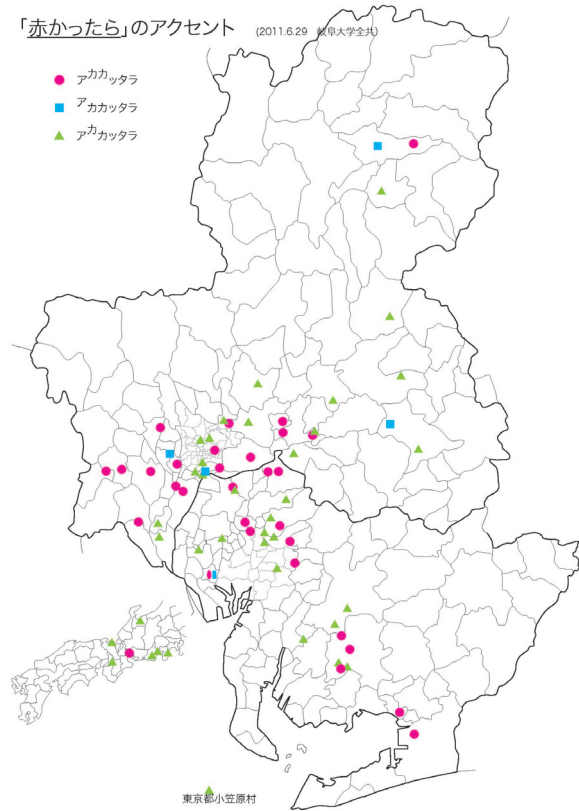
一方で、否定形は、共通語と同じ「アカクナ^カイ」●が、特に愛知県で優勢になりかけている。

連用形類の「～かった」「～かったら」については、次のような結果が得られた。

共通語はいずれも前の「カ」に下がり核のある▲であるが、これは、岐阜市や名古屋市周辺にやや集まって観察される。伝統的な語形は後の「カ」に下がり核のある●である(ただし、今回はあえて方言らしさを消そうとして2拍目を高く発音した)。こちらは両県に広く見られた。

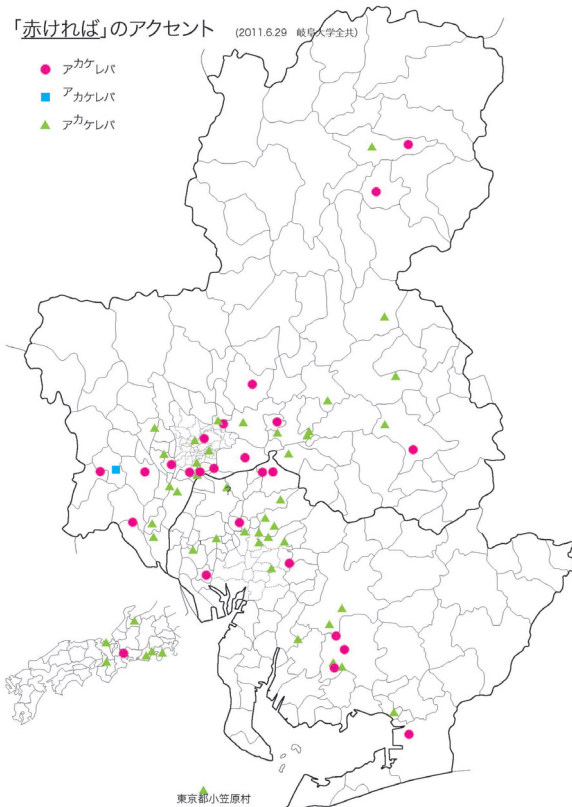


地図33 「赤かった」



地図34 「赤かったら」

最後に、条件形を見ておく。



地図35 「赤ければ」

標準語形は「カ」で下がる▲で、伝統的な形は「ケ」に下がり核のある●である。名古屋市および近郊で、▲が多くなっており、一方、三河地方の岡崎市や岐阜県美濃地方西部でかたまって●が見られる。やはり、都市化の進んだ名古屋から共通語化していると言えようか。

なお、伝統語形の「アカケヲリャ」は、「ケ」に下がり核があり、その点では●と同じである。

しかし、なぜ、共通語のアクセントに近づく活用形とそうでないものがあるのかという疑問は、残る。特に、共通語と愛知方言が共通の語形を用いる「赤かった」よりも、方言語形がまだまだ多く聞かれる「赤けりゃ」に対応する「赤ければ」で共通語化がより進んでいることに対して、今回の調査からだけでは、判断するに十分な資料は得られなかった。

方法論もあわせて考え原因を探らなければならない。

8. おわりに～教育現場におけるアクセント

国語教育では、どのようなアクセントで教えるべきであろうか。現行の学習指導要領ではアクセントの共通語教育までは謳われていない。また、アナウンサーでも一様のアクセントでニュースを読んでいるとは言い切れない昨今、教科内容を教える教員にそこまで求めるのは酷であろう。

一方で、アクセントが、語彙ほど明確に、方言かそうでないかを含め、あまり頓着されてこなかったのも事実である。たしかに「橋」と「箸」を区別することは意識されてきたであろうが、このような語の弁別性に関わらない「赤い」が平板型か中高型かなどというレベルのことは、この地域では特に意識に上りにくかった。

アクセントを教室で教えるとすればどのようなことが考えられるであろうか。ひとつは、共通語アクセントの教育である。しかし、昨今の方言尊重の潮流と逆を行くことになり、時代にそぐわない。もうひとつは、方言アクセント保持教育である。若年層でこれだけ変化してきているアクセントを、伝統的なアクセントに回帰させようという方向性である。もちろん、これも現実的ではない。現実的といえば、方言アクセントはそのまま子どもたちから奪わず、共通語のアクセントとある時期に対照して教えるやりかたがよいであろう。就職や進学などで故郷を離れたときに、故郷のアクセントを保持するか新天地のアクセントを習得するか、それは個人に任せたとしても、生来のアクセントを意識に上げておくことは必要でないだろうか。言語内省力は、アクセントに限らず語彙や文法など、国語科で全般に伸ばしたい力である。もちろん、「共通語＝絶対正しい」という意識を打破した後ではあるが。

もうひとつ、アクセント教育が必要である理由は、複合語のアクセントが、今非常に混乱していることである。NHKのテレビニュースで「常滑焼祭り」について原稿を読んだアナウンサーが、「ト

「コナメヲヤ「キマツリ」と発音していた。2カ所下がり核があり、「ヤ」が下がっていたことから、これは、2語の「常滑」と「焼き祭り」であると受け取られるアクセントであった(2008年8月23日東海地域ニュース)。これを、1回だけの間違いとして臨時的に述べたのではなく繰り返したことに、アクセント教育の不備を感じずにはいられなかった。

このようなアクセントは、よく耳にする。

- ・ (北京オリンピック柔道) ヒャ「ッキロチョ「ーキュー (2008.8.25 NHKオリンピック中継)
- ・ チョ「ー「コーソービ「ル (2009.9.26 NHKワンダーワンダー)
- ・ ダ「イガクニュー「シーセ「ンターシ「ケン (2010.1.15 C B C イッポウ天気予報)
- ・ ハ「ンタイ「セ「イリョク (2011.8.22 ANNスーパーJチャンネル)

「百キロ超」の「級」であるのであれば、「ヒャ「ッキロチョ「ーキュー」, 「超高層」の「ビル」ならば「チョ「(「ーコーソービ「ル」, 「大学入試センター」の「試験」ならば、「ダ「イガクニュー「シーセ「ンターシ「ケン」となるはずである。最後の例も、「反体制」がひとまとまりになった「ハ「ンタイ「セ「イリョク」でなければならない(NHKのニュース7ではこのように正しく読んでいた)。同じように、「名古屋市長選挙」は、各局とも「ナ「ゴヤシ「ョ「ーセ「ンキョ」を連呼したが、「名古屋市長」の選挙であることから、本来、「ナ「ゴヤシ「ョ「ーセ「ンキョ」でなければならない。

語のアクセントだけでなく、語境界を示すアクセント単位もあらためて教えなければいけないときに来ているのではないか。

たかが、アクセント。されど、アクセント。国語教育で軽んじてよい言語要素ではないのである。きちんとした言語理論に基づいた教育が俟たれる。

【付記】

本考察は、2011年度科学研究費基盤研究(C)「岐阜県方言データベース構築ならびに総合記述に関する研究」(代表:山田敏弘, 課題番号23520549)の成果の一部である。

【参考文献】(本文中に引用した市郡町村史は除く)

- 秋永一枝編(2006)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 梅沢伍郎(1952)『岐阜県稲葉郡加納町附近 尋常小学国語読本に表はれた方言標準語のアクセント対照』NHK放送文化研究所編(1998)『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』NHK
- 奥村三雄編(1976)『岐阜県方言の研究』大衆書房
- 鏡味明克(2003)「愛知三重岐阜県境の固有名詞アクセントの変化」『名古屋・方言研究会会報』第20号 名古屋・方言研究会
- 鏡味明克・小原あゆみ(2001)「名古屋市地下鉄・バスのアナウンスにおける地名アクセントと市民アクセント」『名古屋・方言研究会会報』第18号 名古屋・方言研究会
- 杉藤美代子(1998)『柴田さんと今田さん 日本語音声の研究6』和泉書院
- 山田達也(2002)「名古屋方言における動詞変化形のアクセント(その2)」『名古屋・方言研究会会報』第19号 名古屋・方言研究会
- 山田達也(2003)「名古屋方言における形容詞の変化とアクセント」『名古屋・方言研究会会報』第20号 名古屋・方言研究会
- 山田敏弘(2004)『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』まつお出版
- 山田敏弘(2011)「中部地方」真田信治編著『日本語ライブラリー 方言学』朝倉書店

